



Title	エルサレム方言の位置づけとその話者について
Author(s)	依田, 純和
Citation	アラブ・イスラム研究. 2009, 7, p. 95-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エルサレム方言の位置づけとその話者について

依田 純和*

0. 導入

筆者は2007年以来、大阪大学世界言語センターの研究プロジェクト「民族紛争の背景に関する地政学的研究—中央アジア、アフリカ、パレスチナ、旧ユーゴの言語・文化の研究—」においてパレスチナの言語研究、特にアラビア語・パレスチナ方言の研究を手掛けている。口語アラビア語の研究は19世紀末以降ヨーロッパを中心として行われてきたが、地域によって明らかに研究の質・量に差が見られ、モロッコ、パレスチナ、エジプトなどは研究が進んでいる一方、アラビア半島、東部マグリブなどは多くの課題が残されている。パレスチナ方言は比較的研究の歴史も古く、文献も多く存在するとはいえ、まだまだ調査が行き届いていない点が多い。エルサレム方言に関する研究も以外と少なく、記述文法はBauer *Arabisch*とLevin *Grammar* の2つのみである。前者は未だに重要な作品とされるが既に100年近く経過しており、また後者はヘブライ語による著作なのでアクセスが困難である。またテキスト集も存在しないなど、学術的な観点から利用できる資料が非常に少ない¹⁾。

一般的にアラビア語の方言を語るとき、エジプト方言、チュニジア方言など「国名＋方言」の組み合わせによって、「エジプト方言の入門書」、「彼はチュニジア方言を話す」などと表現するが、通常これらの表現が含意するものは当該国の首都の方言であり、実際にはそれぞれ「カイロ方言」「チュニス方言」を意図していることが多い。一方「パレスチナ方言」と言う時、次のような事情から同様のアナロジーが適用できるかどうかは議論の余地があるように思える。まずパレスチナ方言の分布地域は現在のイスラエルとヨルダン川西岸地域及びガザ地区であるが²⁾、「パレスチナ」という地域が単独の国家を形成していない。次に、最初のジュンドであるラムレヤリッド、中世から近世にかけて商業の中心地ナブルス、港湾都市ハイファやヤファなど、歴史的にはエルサレム以外にも文化的・経済的・政治的な中心地があり、パレスチナ世界は必ずしもエルサレムを中心として動いていたわけではない³⁾。とはいえ、エルサレムは古い歴史を持つ三つの一神教の聖地であり、都市としての格式、価値は揺るぎがなく、またHalloun *Spoken Arabic* やPiamenta *Jewish Life* p. 5 も述べているように⁴⁾、エルサレムには「エルサレム標準アラビア語」と名づけられるような言語的変種を想定できるほどに様々な地方の出身

*大阪大学世界言語研究センター 特任助教

1) Kimary N. Shahin, "Palestinian Arabic" in *EALL* p. 527.

2) 1.1. 節参照。

3) 筆者が個人的にナブルスとガリラヤ地方の出身者にエルサレムはパレスチナの中心かと尋ねたところ「必ずしもそうとは言えない」との回答を得た。

者が集う場所であり、イスラエル政府もパレスチナ自治政府もそれぞれ自らの首都として考えていることからエルサレムがパレスチナで重要な位置を占めていることは疑念の余地はない。本稿は記述文法、入門書などの編纂に先立ち、パレスチナ方言群内部でのエルサレム方言の方言論的位置付けを示し、その話者の状況について述べるものである。

1. エルサレム方言の位置づけ

1.1. パレスチナ都市方言

パレスチナの都市方言はハイファ、サファド、ティベリア、ヤファ、ガザ、エルサレムそしてヘブロン⁵⁾ で用いられている。Cantineau *Remarques* はシリアとパレスチナの都市方言をなべて都市型S1'方言、即ち古アラビア語の *qāf* が声門閉鎖音で実現する方言、として分類しているが、両地域間では表1のような差異が観察される。この差異から、現在のシリア・パレスチナ方言の都市方言のうちイスラエルおよびパレスチナ自治政府領（ヨルダン川西岸地区とガザ地区）の都市方言を「パレスチナ都市方言」として仮に分類することは正当性が認められよう。

		レバノン・中央シリア方言 (ダマスカス)	パレスチナ方言 (エルサレム・ハイファ)
1	短母音体系	<i>a : ə</i>	<i>a : i : u</i>
2	動詞基本型命令形	<i>CCvC</i>	<i>vCCvC</i>
3	<i>hamza + qāf</i> (OA <i>'uq'ud</i> , OA <i>'aqall</i>)	<i>'ōd, 'a'all</i>	<i>hu'od, ha'all</i> ⁶⁾
4	動詞否定辞	<i>mā-</i>	<i>(mā-) … -š</i>

表 1

一方、パレスチナの諸都市方言間ではそれぞれの方言についての詳細な記述が不備であり、分類は未だ不十分だが、現在まで刊行されている資料をもとに言語的特徴を比較すると、ハイファ方言は3人称複数の人称代名詞で語末の子音が *n* である点でレバノン・中央シリア方言と共通しており⁷⁾、またエルサレム方言はヘブロン方言と同一のグループを構成している（表2参照）。このことから北部 vs. 中西部+東南部という下位分類が可能であるように思われる。

4) Halloun *Spoken Arabic* はパレスチナ方言の入門書である。エルサレムで様々な地方の方言を聞くことができることから「This mixed situation leads me to write about what I call Jerusalemite Standard Arabic in which I focus on the dialect of Jerusalem without neglecting other necessary references to other well-known dialects」と述べて同書で扱う言語が純粋なエルサレム方言ではなく「エルサレム標準アラビア語」であるとしている。

5) これらの方言には次のような代表的な研究がある。ハイファ：Geva-Kleinberger *Haifa*、ティベリア：Geva-Kleinberger *Tiberias*、ヤファ：Arnold *Jaffa*、ガザ：Salonen *Gaza*、エルサレム：Bauer *Grammatik*, Levin *Grammar*, Piamenta *Lexicon* etc.、ヘブロン：Seeger *il-Xalil* など。

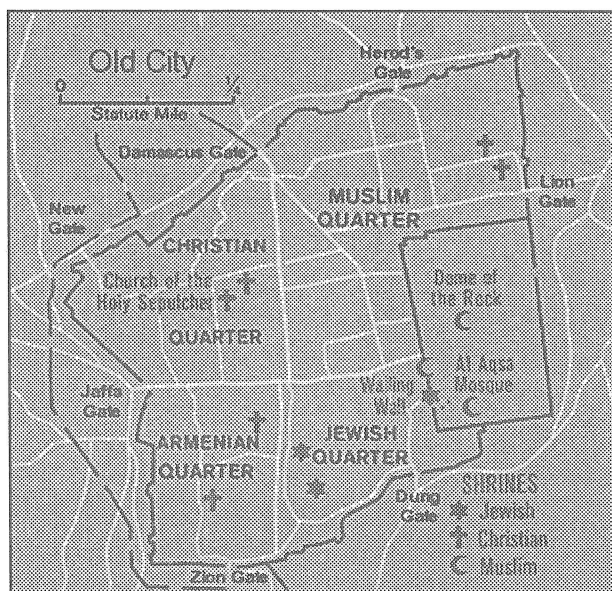
6) 但しこの現象はヘブロンでは観察されない：OA *'aqall* > Hebron *'a'all*。これについては Seeger *il-Xalil* p. 89 を見よ。

		中西部 (ヤファ)	中西部 (ヤファ)	東南部 (エルサレム、ヘブロン)
1	OA <i>jīm</i>	<i>ž</i>	<i>ž</i>	<i>ǧ</i> (<i>ž</i>)
2	2.sg. 独立人称代名詞 の文法性の区別	<i>inti</i>	<i>inta</i> <i>inti</i>	<i>inte</i> <i>inti</i>
3	3.pl. 独立人称代名詞 3.pl. 接尾人称代名詞	<i>hinni</i> <i>-hin</i>	<i>humme</i> <i>-hum</i>	<i>humme</i> <i>-hum</i>
4	イマーラ	<i>-i</i>	<i>-e</i>	<i>-e</i>

表 2

1.2. エルサレム方言の話者

本稿ではエルサレム方言とは、エルサレム旧市街内部で伝統的に用いられている方言を指す。旧市街はユダヤ人地区、ムスリム地区、クリスチャン地区、アルメニア人地区に分かれている。



(http://wikitravel.org/en/Jerusalem/Old_City)

2003年末現在でエルサレム旧市街の人口は35,372人で⁸⁾で、それぞれの地区の人口の内訳は以下のとおりである。但し、この統計は宗教別人口なので、民族構成や使用言語を知ることとはできない。

8) 以下エルサレム旧市街の人口統計は Israeli Central Bureau of Statistics の December 31, 2003 のものである。

	ムスリム	キリスト教徒	ユダヤ教徒	不 明	合計
ムスリム地区	23461	1354	431	2	25248
クリスチャン地区	1242	3888	143	3	5,276
ユダヤ人教地区	560	12	1811	4	2387
アルメニア人地区	504	1205	748	4	2461
合計	25767	6459	3133	13	35372

表 3

2. エルサレム方言の話者

2.1. アラブ人

アラブ人のムスリムとキリスト教徒はエルサレム方言の話者の中核をなす。ムスリムはスンニー派である。キリスト教徒はカローマカトリック教徒及びギリシヤ正教徒である。主にそれぞれムスリム地区とクリスチャン地区に居住している⁹⁾。

また、これ迄言及されることは少なかったが、ジプシーもアラビア語話者である。現在エルサレムとその周辺におよそ1000人のジプシーが居住しており、大多数はムスリムで、少数のキリスト教徒がいるとされている。彼ら自身、アラブ人・ムスリム・ジプシーという3重の複合アイデンティティを主張している。

ジプシーは伝統的にはインド系の言語を話しており、彼らはその言語を *Domari* と呼ぶ¹⁰⁾。民族名は *Dom* で、これは *Domari* で「人間」を表す。アラビア語による呼称は *Nawar* である。この語には侮蔑的なニュアンスがあるとされるが、ジプシー自身もアラビア語では通常自らを *Nawar* と呼んでいる¹¹⁾。現在エルサレムのジプシーコミュニティでは高齢者は *Domari* とエルサレム方言の二重言語話者であるが、若年層はエルサレム方言の単一言語使用者である傾向が強い。

伝統的には鍛冶、板金などの金属加工や占いなどを生業として移動生活をしていたが、20世紀初頭旧市街ダマスカス門の北側に伸びるナブルス通りで定住テント生活を始めた。英国委任統治領時代は旧市街の東側、後にライオン門の近くに移住させられた。イスラエル建国、第3次中東戦争などの事件に際してパレスチナ人と同様にヨルダンなどへ難民として移住した者もいる。現在は東エルサレム郊外に居住する者も多い。

現在エルサレムのジプシーコミュニティには Amoun Sleem 氏主宰の「The Domari Society of Gypsies in Jerusalem」という組織があり、コミュニティ内の福祉、教育活動を行っている。

エルサレムおよび中東のジプシーの起源は明らかではないが、彼ら自身2つの伝承を持っており、いずれもジプシーはシリアに分布していたバヌー・ムッラというアラブ部族が北インドに移住し、その後サラディンと共にシリア・パレスチナに戻ってきたという内容である。

9) アルメニア人もキリスト教徒であるが別の市街区を構成している。

10) Macalister *Nawar*.

11) *zutt, gurbat, gajar*などの語もジプシーを表す語である。

両者の違いは、第1の伝承はインドへの移住までの話に重点が置かれ、第2の伝承はインド移住後に重点が置かれているという点である。第2の伝承では北インドに逃れたパヌー・ムッラは踊りや歌を良くし、この評判を聞いたペルシャ王バハラム・グル¹²⁾によってペルシャに呼び寄せられ、踊りや歌をやめて農業に従事するよう命じられたがこれに背いたため追放され、モースルに逃げ延びたところサラディンが現れ、彼と共にシリアへ戻ったとされている¹³⁾。バハラム・グルによる音楽家のイラン移住の伝承自体は多くの歴史家が言及しているので歴史的な根拠はあると言えるが、現在のエルサレム在住のジプシーとの関係については不明である¹⁴⁾。

2.2. 非アラブ人

またユダヤ教徒や非アラブのキリスト教徒の中にも、その習得の程度は人によって異なるが、エルサレム方言を使用する者もいる¹⁸⁾。本稿ではユダヤ教徒及びアルメニア人に関しての言及にとどめる。

2.2.1. ユダヤ教徒

イスラエル建国以前に旧市街に居住していたユダヤ教徒はムスリム、キリスト教と同様にエルサレム方言を用いていた。この中にはレコンキスタによってイベリア半島を追放されたセファラディムで伝統的にはラディノ語を使用していた人たちも含まれている¹⁵⁾。多くの地域でユダヤ教徒のアラビア語方言は同地域のムスリムの方言と異なっているが¹⁶⁾、エルサレムの場合、差異は語彙に限られ、音韻論・形態論に関して殆ど差異は認められない¹⁷⁾。

2.2.2. アルメニア人

エルサレム旧市街にはおよそ2000人のアルメニア人が居住している¹⁹⁾。エルサレムのアルメニア人コミュニティの歴史は古く、少なくとも西暦5世紀にさかのぼるとされる²⁰⁾。エルサレムのアルメニア人コミュニティはその出自に応じて大きく2つのグループがある。一つは古くからエルサレムに居住しているグループで *k'alak'ac'i* 「都市民」と呼ばれている²¹⁾。もう一つはオスマン帝国領内から最近移住してきたグループで

12) バハラム五世、第14代ササン朝ペルシャ王。ヤズデギルド1世の子。この王についてはシャーナーメに言及がある。

13) *Williams Chronicle* pp. 9-13, *Matras Legends* pp. 15-36.

14) *Matras Legends* pp. 1-6.

15) *Piamenta Life* pp. 2-3.

16) *Blanc Baghdad* 及び *Yoda Tripoli*.

17) *Blanc Baghdad* p. 14.

18) *Piamenta Life* p. 3.

19) *Azarya Armenian* p. 2.

20) *Azarya Armenian* p. 57.

21) 但し、17世紀初頭には12のアルメニア人の家族しかいなかったという記録もあり、一時消滅寸前まで衰退したので、現在のこのグループが3世紀以来の居住者の子孫であるかどうかは不明。

k'alak'ac'i「移住民」と呼ばれており、1915～1920年のアルメニア人虐殺以降、特に前者によってアラビア語からの借用語を用いて *zuwar*「訪問者」と呼ばれている。一方後者は前者を *p'is arab*「汚いアラブ」と呼ばれており、これは前者のアルメニア語がアラビア語の影響を強く受けていることによる²²⁾。この点から少なくとも「都市民」グループは母語としてはアラビア語やトルコ語の語彙を多く取り入れたアルメニア語エルサレム方言を、対外的にはアラビア語エルサレム方言を使用していると考えられる。しかし彼らの言語生活についてはアルメニア語、アラビア語の両面について殆ど研究がなされておらず、現時点で両グループのアラビア語運用の実態については不明な点が多く今後の研究の課題となる。

このようにエルサレム方言を母語として又は第2言語として使用している人々は宗教的、文化的に非常に多様である。既にユダヤ教徒のエルサレム方言は語彙の点を除いてアラブ人（ムスリム・キリスト教徒）のエルサレム方言と同様のものであることは述べた。しかしジブシーやアルメニア人のエルサレム方言はどのようなものであろうか。

非アラブ人のアラビア語についてはイディオレクトではなくコミュニティに独特の特徴を有するような方言であれば、これをエルサレム・ジブシー方言、エルサレム・アルメニア人方言と位置づけることが出来るかも知れない。この場合はエルサレム方言とは異なった枠組みを建てる必要がある。また、記述文法の編纂に伴って収集するテキストを独立したテキスト集として編纂することも検討しており、非アラブ人のエルサレム方言もここに含めたい。

Bibliography

- W.Arnold, "Die arabischen Dialekte von Jaffa und Umgebung" in *Approaches to Arabic Dialects : A Collection of Articles Presented to Manfred Woidich on the Occasion of his Sixtieth Birthday*. eds. Martine Haak, Rudolf de Jong, Kees Versteegh. Studies in Semitic languages and linguistics 38 (Leiden-Boston 2004) 33-46.
- V.Azarya, *The Armenian Quarter of Jerusalem: Urban Life behind Monastery Walls* (London 1984).
- L.Bauer, *Das palästinische Arabisch - die Dialekte des Städters und des Fellachen - Grammatik, Übungen und Chrestomathie* (Leipzig 1913).
- P.Behnstedt, *Sprachatlas von Syrien*, Bd.1.1 Kartenband, Bd.1.2 Beiheft, Bd.2. Volkskundliche Texte (Wiesbaden 1997).
- H.Blanc, *Communal Dialect of Baghdad* (Harvard University Press 1964).
- J.Cantineau, "Remarques sur les parlers de sédentaires syro-libano-palestiens" *BSL* 40 (1939) 80-88.
- Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* (Leiden) [EALL].

22) Vaux *Armenian* p. 233.

- W.Fischer & O.Jastrow, *Handbuch der arabischen Dialekte* (Wiesbaden 1980).
- A.Geva-Kleinberger, *Die arabischen Stadtdialekte von Haifa: in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts* (Wiesbaden 2004).
- A.Geva-Kleinberger, *Autochthonous Texts in the Arabic Dialect of the Jews of Tiberias* (Wiesbaden 2008).
- H.Grotzfeld, *Laut- und Formenlehre des damaszenisch-Arabischen* (Wiesbaden 1964).
- M.Halloun, *Spoken Arabic for Foreigners: An Introduction to the Palestinian Dialect* 2 vols. 2nd. ed. (Jerusalem 2003).
- A.Levin, *A Grammar of the Arabic Dialect of Jerusalem* (Jerusalem 1994) [in Hebrew].
- M.Löhr, *Der vulgärarabische Dialekt von Jerusalem nebst Texten und Wörterverzeichnis* (Giessen 1905).
- Y.Matras, "The State of Present-Day Domari in Jerusalem" *Mediterranean Language Review* 11 (1999) 1-58.
- Y.Matras, "Two Domari Legends about the Origin of the Doms" Offprint (internet version) of *Romani Studies* 10 (2000) 53-79 (http://romani.humanities.manchester.ac.uk/downloads/2/Matras_legends.pdf).
- H.Palva, "A General Classification for the Arabic Dialects Spoken in Palestine and Transjordan" *SO* 55:18 (1984) 359-376.
- J.Peterson, "The Last Migration? Jerusalem's Gypsy Community" *Jerusalem Quarterly* 18 (2003) 44-54.
- M.Piamenta, "Jerusalem Arabic Lexicon" *Arabica* 26 (1979) 229-266.
- M.Piamenta, *Jewish Life in Arabic Language and Jerusalem Arabic in Communal Perspective - A Lexico-Semantic Study* (Leiden-Boston-Koln 2000).
- J.Rosenhouse, "Jerusalem Arabic" in *EALL* vol. 1 pp. 481-493.
- E.Salonen, *Zum arabischen Dialekt von Gaza*, 2 vols. (Helsinki 1979-1980).
- U.Seeger, *Der arabische Dialekt von il-Xalil* (Hebron) (Karlsruhe 1996).
- B.Vaux, "The Armenian Dialects of Jerusalem" in *The Armenians in Jerusalem and the Holy Land*, Michael E. Stone, Roberta R. Ervine, Nira Stone eds. (Louvain 2002) 231-254.
- A.Williams, *The Dom of Jerusalem: A Gypsy Community Chronicle* (Larnaka 2001).
- S.Yoda, *The Arabic Dialect of the Jews of Tripoli (Libya): Grammar, Text and Glossary* (Wiesbaden 2005).